

{ 日植防シンポジウムから }

北海道における水稻栽培と病害虫防除の現状と課題

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
の
中央農業試験場
野 津 あ ゆ み

はじめに

広大な畑作地帯のイメージがある北海道は、実は水稻でも全国有数の主産地である。2024年は作付面積、収穫量とも新潟県に続いて全国2位、反当たり収量も592 kg/10 aと全国トップクラスの単収となっている（農林水産統計、2025 a）。多くの産地で大型の穀類乾燥調製貯蔵施設等が整備されていることもあり、1等米比率が全国平均を上回って推移し、昨年の高温傾向の中でも91.2%と比較的安定した高品質の米が出荷されている（北海道農政部）。

北海道最大の水田地帯である石狩川流域では、昭和40～50年代に圃場整備が集中して行われ、全国有数の大規模な穀倉地帯が形成された。品質・食味の向上が求められるようになった1980年には、良食味品種育成のため道立農試による「優良米の早期開発事業」を開始し、1988年にそれまでの北海道米のイメージを一新する‘き

らら397’が誕生、全国で北海道米が注目されるきっかけとなった（北海道農産協会、2023）。その後も、土地改良や技術・品種の開発などを重ね、現在では、「ゆめぴりか」をはじめ、日本穀物検定協会の食味ランキングで「特A」を獲得した品種も登場して、“安全・安心でおいしい北海道米”として高く評価されている。

そこで、その北海道における、水稻栽培と病害虫防除について、現状と起こりつつある変化、そこから生じる課題について論ずる。なお、本稿は2025年9月に開催された日本植物防疫協会シンポジウム「最新の水稻における病害虫防除を巡る課題」での講演をまとめたものである。

I 北海道の水稻栽培

経営体数は2024年現在でおよそ8,700（図-1）、うち主業農家が7割以上を占める（農林水産省、2025 b）。特に、10 ha以上の大規模経営体が作付けする水田で、作

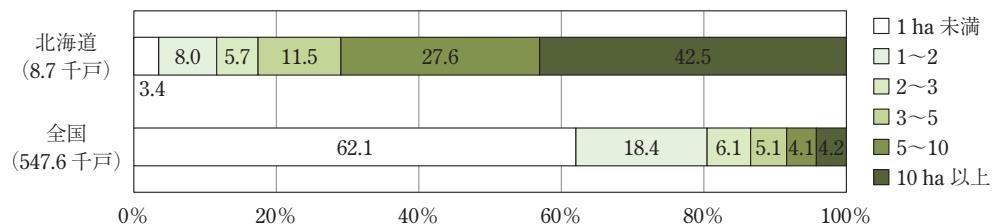
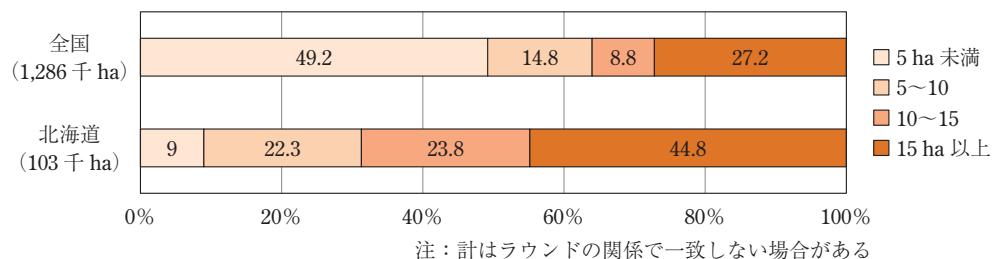


図-1 面積規模別経営体数（農林水産省「令和6年農業構造動態調査」）



注：計はラウンドの関係で一致しない場合がある

図-2 水稲作付面積規模別面積割合（農林水産省「2020年農林業センサス」）

Current Status and Issues of Paddy Rice Cultivation and Pest Control in Hokkaido. By Ayumi Notsu

（キーワード：北海道、水稻栽培、病害虫防除）